

春雨物語序文考

飯倉，洋一

<https://doi.org/10.15017/2332625>

出版情報：文學研究. 84, pp.47-59, 1987-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

春雨物語序文考

飯 倉 洋 一

『春雨物語』は依然として評価の定まらぬ作品集である。秋成の思想・学説が生のかたちで取り込まれていることが作品の文学的形象性にどう影響するかという論議はその代表的なものである。思想が表面に顕われすぎること、難点とする立場、逆に思想小説として高く評価する立場、自身の学説を対象化・戯画化した点に面白さを求めようとする立場、あるいはそれらの議論そのものを相対化してしまうような新しい読みの可能性も提起されつつあって、『春雨物語』研究はいま百家争鳴的状况を現出している（その一方で作品論の先行しすぎることへの反省もあり、諸稿本の緻密な比較研究が木越治氏等によって進められている）。多様な読みを許すことが傑作の条件だとすれば『春雨物語』こそは傑作の名にふさわしい、という言い方はよく目にするところである。だが『春雨物語』を作者の意図に沿って読もうとする場合、多様な読みの中からそれにふさわしいものを選び出し、あるいは新たに発見するための視軸が設定されなければならない。

その手掛かりの一端はおそらく序文に秘められている。だがここにも〈多様な読み〉が存在する。というより従来の注釈・現代語訳には序文の文章構造を説明するに説得性をもつものがなかったと言ってもよい。だがそれはある

程度致し方がない。この序文には省略が多すぎて、どんなに忠実に訳出しても、またいかに多く語句の用例を探し出して、どうにも把握しがたい文脈の屈折がいくつも見られるからである。いまひとつの問題として、従来の序文解釈はあまりにも秋成自身の文学活動と結びつけ過ぎたきらいがあった。秋成が序文を草したのは疑いのない事実だが、だからといって秋成がそこで自己の文学的立場を表明するとは限らない。後述するように、『春雨物語』の虚構は序文からすではじまっており、『春雨物語』各篇の語り手同様、序の書き手も秋成によって設定された虚構の人物である、という考え方も成立しうるであろう。

述べてきたごとく、語釈を繋ぎ合わせるだけでは到底この序文は理解できない。我々は序文に見られる文脈の屈折が秋成のいかなる発想の根から生じてきたのかを見通した上でこれに立ち向かわなければならぬだろう。

二

はるさめけふ幾日、しづかにておもしろ、れいの筆研とう出たれど、思ひめぐらすに、いふべき事もなし。物がたりざまのまねびはうひ事也。されどおのが世の山がつめきたるには、何をかかたり出ん。むかし此頃の事どもも人に欺かれしを、我又いつはりとしらで人をあざむく。よしやよし、寓ごとかたりつゞけて、ふみとおしいたゞかする人もあればとて、物いひつゞくれば、猶春さめはふる〜。

(富岡本)

『春雨物語』序文についての言及はきわめて多いが、そのほとんどは「物がたりざまのまねび」以下の〈物語論〉に集中していて、この序文が「春雨」ではじまり「春雨」で終わることの意味は、従来あまり問われてこなかったようだ。しかし「春雨」は題名に冠された言葉であり、序文における「春雨」の意味はないがしろにはできないはずである。まずそれを問うた論考を掲げておこう。

高田衛氏は秋成の一号である「三余齋」の「三余」が「冬」「夜」「雨」を指すことをふまえて、

閑暇と無聊を表す「春雨」を序にうたうのは、先の〈三余〉と脈絡しており、『徒然草』の作者が「つれづれなるままに……」と述べるのと同じ気持ちであるとともに、この老年の物語執筆における売文〈職業〉性の拒否をも表示しているとみるべきであろう。（鑑賞日本の古典『秋成集』）

と述べた。日暮聖氏は高田氏と同様、この序文の背後に『徒然草』序段が窺えるとし、それぞれの書き出しおよび結びの呼応を指摘したうえで、「そこはかたなく書きつづれば、あやうしこそものぐるほしけれ」（徒然草）と「物いひつづれば、猶春さめはふる〜」（春雨物語序）を比較して、

へあやしうこそものぐるほしけれ」と書いたときのそのへものぐるほしさは、書くことによって生じたものぐるほしさであるが、この直截にかたられた兼好の言葉に対して、秋成は春雨のただならぬイメージをもってした。

と述べ、「春雨」が秋成の執筆時の意識を象徴するという読み方を提示した（『春雨物語』の序「日本文学」一九八五年十月号）。また、中村博保氏は「猶春さめはふる〜」に「物語のロマネスクと幻想を象徴」と注している（小学館版日本古典文学全集）。いずれも魅力的な説であるが、この序文の中で「春雨」がいかに機能しているかについては、なお考える余地がありそうに思われる。

「はるさめけふ幾日、しづかにておもしろ」という書き出しは、和歌の世界への導入としてびったりくる文である。「おもしろ」は霧のようにこまやかな降るや降らぬの雨の興趣を端的に表出した言葉である。この春雨に誘われて何か詠ぜんとするのが風流の人というものである。事実、秋成自身が「春雨梅花歌文巻」と仮に題された長巻（文化五年二月成立）の最初にある春雨の連詠三十余首を次のような契機で詠んでいるのだ（京都大学文学部国語学国文学研究室編『谷川家蔵上田秋成資料集』所収）。

春さめしつかにふりておもしろ、雨の歌軒の玉水とかそへもせで、あした、れいの亜檀の手習に、清うこそあら

ね、

言うまでもなく、これは『春雨物語』の序文の書き出しに酷似している。同じく「春雨梅花歌文巻」に収められる「春雨」を詠じた二十六首の連詠も「はるさめこからねど、けふもふる、物いひ残したるこゝちすれば、又よみける」という前書を持つ。『春雨物語』と同時期に認められたこれらの文章が物語るのは、『春雨物語』序文の書き出しが本来的には「春雨」をうたう風雅な世界への導入部としてふさわしいということであった。ところが『春雨物語』序文の作者は「れいの筆研」を取り出しながらも「思ひめぐらすに、いふべき事もな」い。従来の注釈・論考はこの部分にあまり触れていないが、「いふべき事もなし」とは「眼前の「春雨」については特にこれといって言表することもない」あるいは「眼前の「春雨」に誘われて述べたくなくなるようなことは何もない」と「春雨」に関わらせて解すべきだと思ふ。風雅な世界を前にしながら、そこに入って行けない、あるいは背を向けてしまふ人間が想定されているのである。

ところで、そういう屈折した文脈は『藤篋冊子』巻五「聴雪」にも見出される。

…今は目こそ疎けれ、足こそなえたれ、この降雪に物ばかりはいはんとて、紙すゞりとう出たれど、ゆびは、龜のごとにかゞまりて、筆あゆますべきもあらねば、おき火かいまさぐりつゝ、こしかたを忍び、今をもうちなげきては、例の繰言すなん…

この場合、まさに物理的な事情で筆を執れなかったのだから、『春雨物語』序とは状況がやや違うが、「筆あゆますべきもあらねば」を境に話が身近の事に移っていく点には注意しておきたい。風雅が否定されたわけではないが、「降雪」は自己憐愍の呼び水でしかなかったことになる。一旦措定された和歌的世界が散文的世界へと変換する構図がここには窺えるし、「雪」を観念で捉えるのではなく現実的感覚で把握する方向が示唆されていると言ふこともできる。

「春雨」の興趣が和歌的世界における約束に過ぎず、実生活においてはさまざまな受け取りかたのあることを、秋成は次のように述べたことがある。

「雨ははるさめぞおもしろと云ふ。花の父母のやうにいへど、うたて嵐のさそふ散りがたには何とか云。蛙の妻よぶと聞人もありしが、おほかたは、雨もよの声とて、衣とき洗ふをとめらが憎しとらるるものを、沢田に水たくはへまくする里々には、かしましものともいはず、（『藤篋冊子』巻五「枕の硯」へ十春）のうち「春雨」この発想はいかにも散文的発想である。そして、我々はこれらの文章から秋成の中に定型的な風雅の意識を相対化しようとする志向性のあることを予想することができる。『春雨物語』序文の語り出しもかかる視点から考えてみたいのである。

「思ひめぐらすに、いふべき事もなし」とは「聴雪」に見られたごとく風雅な世界を前に立ち止まった者のつぶやきであった。だがその立ち止まりは指がかじかむというような物理的な事情ではなかった。それは序文の書き手が「山がつめきたる」者であることに関わると思われる。

三

が、その前に「物がたりさまのまねびはうひ事也」という問題の文章がある。周知のごとくこの部分の解釈には諸説あって、その主なものを示せば、〈物語めいた書きぶりは、初心者のすること（暗に雨月をさすか）〉（重友毅説、日本評論社版『秋成』など）、〈擬古文体の小説は初めてだ〉（中村幸彦説、積善社版『校註春雨物語』など）、〈演義小説の方法（体裁）を真似て書くのは、初めての事である〉（塚光一説、「春雨物語における秋成の意図」「立命館文学」一四六号）という具合で定説がない。ただ先述したように、従来の解釈はいずれも秋成の実際の文学活動を考慮

に入れすぎたきらいがあったのではないか。『春雨物語』各編の語り手が秋成によって創造されているように、『春雨物語』序文の書き手も現実の秋成自身である必要はない。ややニュアンスは異なるが、中村博保氏も「この序文は、いわゆる伝達を目的とする平叙文としてつづられていたわけではない」ことを強調している（『春雨物語序と寓まがごとの構造』松尾靖秋編『近世文学論攷 研究と資料』所収）。そもそも数次にわたる改稿過程において、つねに「春雨」の降り続く情景から序文が書き出されること自体が、この序文の虚構性（修辭性）を証明している。従って、たとえば擬古文体の小説を書くのは初めての事である」という解釈に対して、〈秋成は『春雨物語』以前に擬古文体の小説を書いている〉と批判したり、逆にその批判を予想して、〈秋成は前作を無視している〉とか〈春雨物語は意識においていない〉とか言うのは、私には有効な議論であるとは思えない。問題はこの文を前後の文脈にいかにも有機的に連関させて読むかということである。

「思ひめぐら」しても「いふべき事」はない。では「物がたりざまのまねび」でもやってみようか。ただそれは自分にとって「うひ事」である——この論理は一見飛躍しているかのように見える。「いふべき事」がないならそこで筆をしまえばいいではないかという考え方も成り立つのである。しかし、この書き手は「れいの筆研」とあるように書くことを習慣にしている人間であった。「春雨」の感興をうたう気にはなれないが、何かを綴ろうとする意志はある。そこで「物がたりざまのまねび」を、ということになる。

「物がたりざまのまねび」は〈物語のような形式を真似て書いてみることに〉と字義通り解しておく。その具体的な在り方は序文の後半で明らかになる。「うひ事」は〈初めての事〉でよいだろう。この部分に関しては私は特に新見をもたない。ただ、「まねび」と言い、「うひ事」と言う書き手の本来の立場は「物がたり」と対立する和歌的世界にあるのではないかという見通しを提示しておきたい。

次の「されどおのが世の山がすみきたるには、何をかかたり出ん」の「されど」は「うひ事なり」を承けていると

見るべきであろう。「物がたりざまのまねびはうひ事」だが、わたしのような「山がつめきたる」ものには他に何を
書くことができようか、と。従来この部分の解釈は非常に曖昧であった。それは、「されど」を「物がたりざま（の
まねび）」に比重をおいて考えていたからである。〈物語のさま真似てみるのは初めての事、しかしながら、わたしの
ようにあって甲斐なき者、どのような事がしるせよう〉（中村博保『全集』現代語訳）のごとくに。そのように解釈す
ると、もとより「いふべき事もな」いこの序文の書き手にはいよいよ書くことがなくなってしまふ。無論、それは謙
辞であつて文字通り受け取る必要はないという反論も出てこよう。しかしながら、前にある「いふべき事もなし」と
は明らかに書く能力を前提とした言い方であるから、ここで「へどのような事がしるせよう」というのは論理的に矛盾
する（なお高田衛氏は『鑑賞』で「私のような山がつめいた者には、他に何事をか書くことができよう」と解してい
る）。

問題は「おのが世の山がつめきたる」の解釈である。ここでも秋成の実生活と関わらせる解釈（この語は、本書
が作者晩年の窮迫時代に成つたことを、みづから語るものと見られる）とする重友毅氏の説（など）が見られるが今そ
れは問題にしない。大勢を占めるのは「山がつめきたる」を「物がたりざま」に対して述べた言葉と解するもので、
「物がたりざま」にふさわしからぬ〈非文化的な生活にある〉（中村幸彦『校註春雨物語』）、あるいは〈教養なき己〉
（中村博保『全集』頭注）などと注されている。しかし非文化的な生活者や無教養人が「れいの筆研」を取り出すとい
うのはやや不自然に思われる。もし、これも謙辞だと言うのなら随分見え透いた謙辞と言わざるをえない。その点日暮
氏は〈風流を解せぬ者〉ととつて無心の立場に立つ秋成の姿勢を読み取ろうとする（前掲論文）。これは大変示唆的
な読みである。ただし「山がつめきたる」を「物がたりざまのまねび」と拮抗するとみる点では、日暮氏も従来論
者と変わらない。

私は「山がつめきたる」を序文の語り出しに呼応させて解釈したい。「春雨」の風趣を前に「いふべき事」もない

状態がすなわち「おのが世の山がつめきたる」だと考えるのである。そうすると「山がつめきたる」は人物そのものを規定する表現ではなく、本来文化的で教養もありもちろん風流も解する（すなわち和歌的世界にふさわしい）人間が、いま（一時的に）「山がつめきたる」状況に陥ってしまったことを示す言葉だということになる。そこにはじめて〈不遇〉のイメージも重ね合わさってこよう。「山がつめきたる」状態では和歌を詠むような気持ちにはなれない、だが筆を棄てることもままならぬ、そんな自分が書きうるのは「物がたりさまのまねび」の他にはないというわけだから、「おのが世の山がつめきたる」は従来の解釈とは正反対に「物がたりさまのまねび」にふさわしい自己であるということになる。

以上を踏まえて冒頭から意味を繋いで行けば、〈静かに降り続く春雨に、普段なら歌のひとつも詠もうけれど、どうも風流心は起きない模様だ、やってみた事はないがひとつ物語のまねごとでもやってみるか、今の無風流な私には他に何も語れまいから〉となるだろう。これで和歌的世界から散文的世界への転換が企図されたことになった。ここから序文の書き手はいわゆる〈寓言論〉を展開してゆく。

四

「むかし此頃の事どもも人に欺かれしを、我又いつはりとしらで人をあざむく」は諸注ほぼ同様の解釈を下している。一例をあげておこう。

昔の事、この頃の事、古い記録やら、新しい伝聞やらをすっかり事実と思ひ込まされて、それが偽りであると思はずに今度は私が人を欺くことになりそうだ。

（高田衛『鑑賞』現代語訳）

ただし日暮氏が指摘するように、この一文は、序者が信じてきたものをまた人に伝え結果として人をだますという意

か、他人の著作にだまされてきた序者が今度は自分で人をだます書物を書くという意かの二様にとれる。日暮氏自身は後者をとり、その場合論理的矛盾を生ずる「いつはりとしらで」の一句に重要な意味を見出している。すなわち、
「しらで」と表されることで、書くことが「あざむき」の行為であるとともに「まこと」の行為でもありうるという意味をふくみこむものとなる。対立する語の間を振幅し、論理的な矛盾を抱えこみ、書くという行為の間にある迷路を表現していく。

と。『春雨物語』の各篇が秋成の創作であることは言うまでもない。しかし実際に展開される『春雨物語』の叙述形式が、他人の記録伝聞をそのまま語り伝える形式であるか、みずから創作して語る形式であるかは一目瞭然である。森山重雄氏が指摘するように『春雨物語』の「各篇の結びをみれば、多くが伝聞のないし伝承的語り形式になっている」（『幻妖の文学 上田秋成』）。

当たり前のことだが「物語」という形式はそもそもそうしたものであった。賀茂真淵の『伊勢物語古意』「総論」の冒頭に次のごとくある。

かゝるふみを物語と名づけたる事は、まこと実の録のごとくにはあらで、世の人のかたり伝へ来し事を、まこと真言寓言をも問はず其かきたるまに、かきつゝ書集たるてふ意にて、今云むかし、あその例なし物がたりに同じ

『春雨物語』序文の「いつはりとしらで」は右の「真言寓言をも問はず」に対応すると考えてよいのではないか。我々はこの序文があくまで「物がたりざまのまねび」をしようとする者の手になっていることを忘れてはならない。序者はここで物語の形式を再確認する必要があったのである。したがって、「人をあざむく」とは、やはり序の書き手が意識的に行うのではなく、自分の伝え聞いた話をそのまま他人に伝えることによってもたらされる結果と考えるべきであろう。

ところで富岡本の「海賊」の末尾には「是は我欺かれて又人をあざむく也」の言があって、これが序文の「…人に

欺かれしを、我又いつはりとしらで人をあざむく」に呼応していることは諸家の指摘する通りである。「海賊」は実際には出会うはずのない紀貫之と文室秋津を対面させる趣向の物語であるが、そのことを踏まえて右の言は「時代違ひの兩人を會せしめたことへの言譯」（重友毅氏前掲書）の解に代表されるように、他人の著作に欺かれてきた秋成がこの作品では自ら史実の改変を行ったことの表明と考えられてきた。それはその通りであろうが、あくまで文脈に即して解釈するなら、これもやはり「海賊」の書き手が「海賊」に書かれたような内容の話を何かで知って、それをそのまま信じて人に伝えた結果「人をあざむく」ことになったとらねばなるまい。すなわちへこれは私がかつて事実とだまされた話だが、それをこうして書くことによってまた人を欺くことになった」と。もちろん読者は「海賊」が創作であることを知っている。それなのに敢えてこのようなことを言うのは、書き手が「物がたりざまのまねび」をしているという設定になっているからに他ならなかった。つまり秋成は富岡本に関するかぎり、「物がたりざま」とはへ偽りを語り伝えるスタイルであるという認識を二度までも書き手に語らせたことになる。

だが人を偽り欺くことは、たとえ結果であったとしてもこの序者にはうしろめたいことであつたらしいことは続く「よしやよし」で推測される。ここにも序者の立場が垣間見られよう。彼は積極的に物語ろうとはしない。また物語の効用を説くこともない。彼の物語執筆の動機は主体的なものではなく、ただ和歌の世界に足を踏み入れることのできない者（山がつめきたる者）のやむをえない方向転換だったにすぎないのである。少なくとも秋成はそのように序者の立場を規定した。そういう立場の人間であるがゆえに序の書き手は次に弁解の言辞を弄することになるのである。「寓ごとかたりつゞけて、ふみとおしいたゞかする人もあればとて」も従来様々に論議されてきた部分である。しかしこれが書き手の自己弁護であることは動かないだろう。人を偽り欺くことにうしろめたさを覚えていた初心の物語作者は、自分よりはるかに嘘つきの人（々）を挙げるによってみずからの行為を正当化しようとする。「寓ごと」とは何か、「ふみ」とは何か、「おしいたゞかする人」とは本居宣長を指すか否か、そのようなことがこれまで盛んに

論議されてきたのだが、序文の流れの中で考えるとき最も重要なのは、ここで初めて序者が物語執筆に向けて動き出すことが出来たということであろう。

それに続く「物いひつゞくれば、猶春さめはふるく」で序は閉じられる。書くことへの手掛かりがようやく得られ、「物がたりさまのまねび」を実行に移した時、ふと顔をあげると、再び「春雨」が現前していた。否、いかに書くべきかを思い詰めていた書き手に何の関わりもなく「春雨」は降り続いていたのである。

叙上のごとく読んでくれば、『春雨物語』序文は、もともと風雅な和歌の世界に在った人物が一時的に風雅ならざる境遇に陥り、それでもやむにやまれぬ書く意欲を満たすために散文的世界へ入ろうと摸索している文章だと解釈することができる。だが、その際はなぜ物語を書くことで人を偽り欺くことにうしろめたさを覚えるのか。

五

和歌的世界とは美の理念が規範化された世界である。いわゆる題詠は歌題の本意をふまえるという限定の下に行われる虚構の営みであった。それは誰しも暗黙のうちに了解しているはずであるが、秋成はあえてそれを言挙げする人間だったらしい。前引〔春雨梅花歌文卷〕の「はるさめこからねど、けふもふる、物いひ残したるこゝちすれば、又よみける」の前書をもつ「春雨」連詠二十六首の末尾に「けふはふり晴れたれば、歌はいつはり言なりける」と記す。「いにしへ人は萬の物天つちのおのづからにつきて詠せし也」〔金砂』一〕と、古代人の天地自然に随った歌いぶりを賞揚してやまぬ秋成は、ここでテーマ主義的な和歌をものしたことに一種の照れを見せたのであろうか。いずれにせよ、「けふはふり晴れたれば、歌はいつはり言なりける」の言葉が観念としての「春雨」を最も端的な形で暴露していることは確かである。

それと同時に興味深いのは、この連詠が「春雨物語」序文とほぼ同じような書き出しになる前書きをもちながら、それと全く逆の方向へ進んだということではあるまいか。すなわち序文の書き手は春雨を前にして筆と硯を取り出しながら「思いめぐらすにいふべきこともなく、その結果「物がたりさまのまねび」を試みんとするが、皮肉にも春雨は一向にやむ気配もなく降り続けている。一方「春雨」を詠する者は「物いひ残したるこゝちすれば」興に乗って次々に歌を詠み、気付けば雨はやみ空はすっかり晴れている。前者は「いつはりとしらで」と言い、後者は「いつはり言なりける」と言う。まさしく両者は表裏の關係にあると言つてよいだろう。

ところで、「けふはふり晴れたれば、歌はいつはり言なりける」というとき、秋成は春雨の非在に和歌の虚構性を寓したと見ることができよう。換言すれば、「春雨」連詠のために必要なのは雨が降り続くことではなく、和歌的興趣を観念的に保ち続けることであると言うのである。それに対して序文の書き手は実体としての春雨にいわば圧倒されている。彼はそこから目をそらして物語を書こうとする。それは春雨を自在に操つて三十一文字に形象化する技巧よりも、人から聞いたことをそのまま伝える形式が「山がつめきたる」身にはふさわしいからだ。おそらく彼にはいま虚構の世界を彫琢する力はない。あるのは虚実ないませの記録や巷談を語り伝えることへの興味であつた。そこでは、虚構であろうとなかろうと伝達することに意味があり、伝達の内容に関して責任を負う必要はなかつた。しかし彼は物語作者としては初心者であつて、その点にはやや神經質になっている。用心深く「いつはり」もありうると予防線を張つたのが「むかし此頃の事どもも人に欺かれしを」以下の文章であろう。彼が物語の虚構性にこだわる文章を書いたのは、和歌的世界においてはさほど意識にのぼらなかつた「いつはり」の問題が、和歌的世界を出てはじめて書く意識を揺さぶる問題に浮上してきたからであつた。

そしてようやく序者が散文の世界に転じ得ようかという時に再び「春雨」であつた。降り続く春雨がなんとなまなましさをもちて迫ってくるのか。前引の連詠の末尾に記された「歌はいつはり言なりける」が和歌的理念としての

「春雨」を鮮烈に示し得たのとは実に対照的に、「猶春雨はふるく」は実体としての「春雨」を見事に表現した。

こうして我々は『春雨物語』の題名の意味を考察する段階にいたった。「春雨」が語り手を静かにつつむというような単なる背景ではないことははや明らかであろう。そのような次元で「春雨」が題名に採られた例としては、むしろ天保元年自序を有す高井蘭山の随筆『春雨譚』（旧版日本随筆大成第三期五巻所収）を挙げることができる。この序文は「春の雨いとしけくしくあやにく降りて徒然なる折ふし」で始まり、たまたま集まった懇意の三四人が茶を嗜みつつ故事雑談に打ち興じていたところ、一人の旅客が訪れ、蘭山に近著を賜りたいと乞う。にわかのことにて一同閉口するうちに座客の一人曰く、今日語り合った故事を写して与えるにしかずと。さて標号は何とすべきかと言えは客が答えて曰く、「唯今日の事を有のままに春雨譚といはんにかず」と。これで「春雨」の題名の由来は明白である。だが『春雨物語』の場合はそう簡単にはいかない。

『春雨物語』の序者は見てきたごとく、書くことに非常な屈託を抱きつつ筆を進めていた。その屈託を振り切ろうとして「よしやよし」と自得し、「寓ごと」を「ふみ」として読ませる輩よりはまりました。「物いひつゞく」のだった。ようやく視界が開けてきた、そんな感じになったとき、あらためて序者の風雅ならざる境遇を笑うかのように「春雨」が降り続く。物語る人と降りしきる春雨は溶け合うことなく、拮抗する関係を保ちつつけるのである。そう考えてくると『春雨物語』とは、絶好の風流の対象である「春雨」のなかを敢えてする「物語」という意味を担っていることになる。すなわち風雅の世界のなかで「山がつかめきたる」者の語る物語だということである。

何度も述べてきたようにそれは秋成自身ではない。少なくともまずはそのように読んでみるのだが、序文を文脈に即して理解する助けとなろう。秋成が造型した語り手と秋成自身とがどう関わるかは次の問題である。そしてそれは、自説を作品中に投げこんだことの意味とも絡んで『春雨物語』の評価に重要な視座を提供するはずである。